

『暗い流れ』と『塵の中』

— 和田芳恵作品考 —

青木 一男

一 はじめに

— 和田芳恵の長編小説 —

和田芳恵の作品には短編が多い。研究・評論の類には芸術院賞を受賞した『一葉の日記』をはじめとする多くの単行本もあるが、小説となると短い作品が多い。そういった中であつて長編を探してみると、『暗い流れ』と『塵の中』に目がひかれるのである。現に、『和田芳恵全集』（全五巻）の第三巻には、「長編小説」として、この二作が収められている。全集に収められていない作品に『十和田湖』（昭和十七年九月・泰光堂刊）、『離愁記』（昭和十八年十一月・今日の問題社刊）、『小説みだれ髪』（昭和四十二年七月・光風社書店刊）がある。『十和田湖』は十和田湖の養魚に生涯をかけた和井貞行の伝記小説であり、『小説みだれ髪』は与謝野晶子の伝記小説である。『十和田湖』において和井内貞行の姿を追って行く作者和田の姿勢には一葉研究者としての和田を彷彿させるものがあり、たいへん興味をひかれるが、

本稿では和田自身の生活ともかわりを持つ代表作二編について考えてみたい。

『暗い流れ』は、昭和五十年の十月号から五十二年一月号まで十六回にわたり雑誌『文芸』に連載された。『塵の中』は、昭和二十七年六月号の『三田文学』にその発端編としての「露草」が発表され、ついで昭和二十八年四月号・五月号の『三田文学』に「塵の中」が発表され、昭和三十八年十一月にこれらを合わせて光風社から『塵の中』として出版された。ちなみに、『塵の中』は昭和三十九年一月、第五十回（昭和三十八年下半年）直木賞を受賞したが、これより先に『露草』は昭和二十七年上半期の直木賞候補作品に、「塵の中」は昭和二十八年上半期の芥川賞候補作品になっていた。また、『暗い流れ』は、昭和五十二年四月河出書房新社から刊行され、同年五月第九回日本文学大賞（新潮社）を受賞している。まさにこの二長編は作者としては晴れがましい作品と言つてよいだろう。

ところで、両編の発表順は右に述べたように本稿の表題とは逆に

『塵の中』『暗い流れ』の順なのである。しかし、描かれた内容からみると、『暗い流れ』『塵の中』の順なのである。すなわち、『暗い流れ』は、北海道で生まれ育った花田吉平が関東大震災後に東京へ出て来るまでを描いた作品である。言わば一人の男子が生まれてから青年に至るまでを描いている。『塵の中』は新吉原の遊女浮名が馴染客瀬川直吉に勧められて自廃し、直吉の家に入るものの妻の座になじめず、宮城県白石在の村に帰って行くまでが描かれている。『塵の中』は直吉とのかかわりにおいて浮名こと咲子という女性を描いているが、直吉に視点をおけば、妻を亡くし、幼い娘をかかえた男が遊廓で知り合った女を家に引き入れ、堅気な細君に仕上げようとして失敗した話となっている。和田芳恵が私小説作家であったことを考えれば、『暗い流れ』は作者の少青年期を描き、『塵の中』は最初の妻を亡くした後作者をモデルとして描いたものとみられるのであり、両作品は作者自身のレールの上ののである。

二 花田吉平の青春

——『暗い流れ』の世界——

1

和田芳恵が昭和五十二年十月五日に亡くなったとき、その日の夕刊⁽¹⁾に写真入りで訃報が載った。その冒頭には、

老境の官能

作家和田芳恵氏死去

一葉の研究などで知られる作家和田芳恵氏が五日午前一時三十二分、十二指腸カイヨウのため、東京都大田区池台一ノ二九ノ八の自宅で死去。告別式は十一日午後二時から三時まで東京築地の本願寺で。喪主は妻、静子さん。

とあり、以下病歴・経歴などを一行十五字全四十一行の文章で伝えている。

私はこの記事を読んで、まず見出しの「老境の官能」に注目させられた。『接木の台』『抱寝⁽²⁾』『暗い流れ』など晩年に発表された諸作を読めば、そういうレッテルをはられるのも当然かもしれない。たしかに和田の作品を読んでもれば、性を扱った作品が多いのに気づく。和田の業績の中で大きな部分を占める一葉研究の中にも性を重視する姿勢はうかがえるのである。

たとえば彼の最初の一葉研究書である『樋口一葉⁽³⁾』（昭和十六年刊）を読んでみても、一葉と半井桃水との男女関係に深い関心を寄せていることがわかる。一葉は小説修業の師である桃水を恋していたが、深い関係はなかったと見るのが、おおかたの意見である。一葉を永遠の処女としておきたいのは、一葉ファンの心情でもあろう。にもかかわらず、和田は昭和十六年の時点で、

いつの日かいつの夜か、半井桃水によって女の誇りを失ってしまった。その時から、もう、肉体だけは生きていても、心はとうに死んでしまっていたのである。（中略）内体の秘密を桃水によって知った。しかも、かくしごととして知ったためえに音をあげ得ない、言

つてみれば語ってはならぬこと、と、士族出の一葉は思ったに違いない。自分の命を奪う病気について一行半句も書きとどめなかった一葉が、女の誇りを失ったことについて述べなかつたのはあまりにも当然な事である。⁽⁴⁾

と言いつ切っている。これを読んだとき、私は学生時代に講義の中で吉田精一博士が一葉非処女説に触れたことがあつたのを思い出したのであつた。また、和田は『半井桃水がそんなに一葉がわたくしのことかと思つていたとは知らなかつた。』と、一葉がなくなつてからある講演で述べている。この事を何の疑いもなく承認するものがあつたとしたら、少なくとも作家桃水はずかしめるものであろう。⁽⁵⁾と言いつ、いかに通俗作家であろうと、作家の眼をもつ桃水が、一葉の思いを見逃すわけがないとしている。和田は人の一生を性とのかわり得とらえる眼と技を持つていた作家であつたと言えよう。

2

『暗い流れ』は、和田が『自伝抄』⁽⁶⁾の中で「私の半世紀以前に相当する、関東大震災後の東京へ出てくるまでの自伝風な小説」とみ⁽⁷⁾ずから書いてるように、作者自身がモデルと推測される花田吉平の少年時代から上京までが描かれている。

作品は、明治四十三年にハレー彗星が現れた話から書き始め、その年が「私の数えの五つであつた。」と一人称の「私」の語りによつて話が展開してゆく。しかも、ハレーを母にうながされて見ていた吉

平は、はからずも弟修平が母に背負われたまま母の背に小便をたれ流す情景を見て、自分にもそういう思い出があり、「母の背中に触れたままの私の筒先から尿がほどばしるのは、いい気持であつた。」と回想するのであるが、こうした官能的な快楽に対する関心が底流にあり、人の肌を慕う本能的な行為の描写がおりおり姿を見せるのである。右の叙述のすぐ後にも、

シモはきものをきたままの私を背中へ括りつけるだけであつたが、私は自由に動かせる足で、まるみのあるシモのぷりんとした尻を、ぼんぼん弾みをつけて叩いたりした。

など妙に生々しい描写がある。シモとは、吉平の家の女中で、吉平の世話もしていた娘である。

さて、和田はこの小説の題名について、

「文芸」の長編小説は、昭和五十年十月号から五十二年一月号まで、十六回で完結したが、私は年がいてもなく、無我夢中だつた。四百二十五枚の割りだから、いまの長編小説といえない、代ものである。題は「暗い流れ」とした。私の生れた噴火湾沿いの国縫を流れている川は国縫川で、アイヌ語のクンネ・ナインのことである。

意味は「黒い川」とも「暗い川」ともいうらしい。私は「暗い川」から「暗い流れ」という題名を考えたが、寺田は単行本のとき新しい題にしようと言つた。⁽⁸⁾

と書いている。自伝的小説の題名を故郷の川の名にちなんでつけた気持は理解できるが、「暗い流れ」という題名はいかにも暗い。幼少年

期から青年期までを描く作品ならもつと明るい題名でもよさそうに思うが、事実主人公の成長の過程は明るくない。冒頭に描かれたハレー彗星の接近による、あやしげな雰囲気がある作品のモチーフを示しているとも見られる。

毎日新聞の文芸時評で、「暗い流れ」を取り上げた江藤淳は、

この作品で、和田氏が「暗い流れ」と呼んでいるのは、おそらく性のことであろう。そして性を「多数者の力」をもつて文学の中心主題に押し上げたのは、ほかならぬ自然主義派であった。⁽⁹⁾

と述べている。

『暗い流れ』は、北海道の内浦湾に臨む長万部町国縫の荒物雜貨商の家に生まれた花田吉平が、父の事業の失敗ゆえに小学校五年生から新聞配達をして家計を助け、中等学校も金のかからない道立の商船学校へ進み、病気で中退。一年後北海中学二年生に編入し、友人と同人雑誌を出したりするが、家計を助けるため一年間休学して故郷の小学校で代用教員になる。やがて復学し、資産家佐藤家の援助のもとに中学四年を修了すると上京して、佐藤家に書生として住み込む。その秋、従妹道代に結婚話が起きた知らせがあったので帰省し、道代と結ばれる——という主人公吉平の人間形成を縦糸として描かれているが、横糸は吉平の性的体験の軌跡である。あるいは、吉平の「性のめざめ」の軌跡を記すことが、彼の人間形成の過程を綴ることになるとさえ言えそうで、鷗外の「キタ・セクスアリス」を連想させるのである。和田自身も、『文芸』編集長の寺田博氏に「自伝的な長編小説を書いて、

森鷗外の『キタ・セクスアリス』の現代版を心がけてほしい」と言われたそうである。和田の作品には私小説的色彩があり、寺田氏の言葉に導かれて、この作品が誕生した事情がうかがえるのである。

3

『暗い流れ』の主人公吉平は小さいころから従妹道代と仲がよく、結局は道代が吉平の子をみごもるところで小説は終わっている。道代から妊娠したという手紙をもらって、「私の前途に、まっ黒な幕が垂れさがったようであった。」と吉平は思うのだった。まさにこれから学生的身で未婚の恋人と子供をかかえて生きなければならぬ人生があるはずで、したがって問題は未解決のまま作品は終わっている。読者の立場に立てば、続編が書き継がれていくものと期待される終末なのである。

ところで、その終末部のことはさて置き、この小説は主人公が従妹との筒井筒の恋を突らせるまでの青春小説としてとらえることもできるが、性を描くことを重視すれば、道代よりも女中のシモが重要人物とみられるのである。シモは吉平の性の先達であり、道代の場合の幼い者同士の恋人とは違った、ある面では保護者的な子守ではあるが、乳母というか、姉というか——そういった種類の愛情を保ちながら、性の手ほどきもしてくれた女であった。シモは決して淫らな女ではなく、祖母と二人で地味に暮らしてきたしつかり者で、吉平の家に家事の手伝いに来ていた娘であった。それが、吉平の弟が生まれてから、吉平

の面倒を見るようになったのである。そして吉平の心身の成長の過程で彼の心と行動を受け入れ、受け入れた段階では巧みに性の手ほどき役を演じている。まだ幼いころ、シモは女中部屋で吉平を抱いて昼寝をしたことがあった。吉平の足首がシモの股の間に入り、「熱い軟かな湿った裂目へ斧を打ち込んだような形になった。シモは、ほっと声をあげて、私の足首をはさみつけた……」という幼時体験が、シモとの最初の性的なかかわりであった。

シモは小学校を出たばかりで花田家に来て、二、三年ほど手伝っていたが、いつの間にか吉平の前から姿を消してしまう。吉平は姉をシモの行方を話したりするが、はっきりしない。実は、シモは吉平の父と関係があつて花田家を追われ、今は父の陰の女になっている。吉平はシモがあきらめられず、家人に陰れてシモの行方を探し当てると、シモも吉平を歓迎してくれる。中学生になってから、吉平はシモに性の洗礼を受ける。それだけでなく友人の恋人である女学生が妊娠したと悩んでいると、その処置の相談を持ちかけたりもしている。だから、シモは吉平にとって恋慕の対象ではあるが、いつも吉平を導く先達であった。「吉平さん、口先で偉そうなことをいってもだめよ、震えているじゃないの。」と、父とシモの間で心を乱す吉平をたしなめるシモでもあった。

吉平の異性関係は、彼の成長の跡であつた。数え年十三歳になったとき、ブラジル移民の話が小学生の間に広まり、吉平も移民団の若者のような錯覚に陥ってしまった。すると友人力松は小学三年の妹を、

「吉平さんの好きなようにしてもらえ。」と言つて寄越した。吉平は美和子を抱いて横になったりした。函館商船学校へ進んだ吉平は、伯父の店の二階にいる姉と同居するが、店の留守番夫婦の娘八重になつてから姉を心配させた。八重は姉が仕事から帰らないと宿題をみてもらうために二階にあがつてくるようになっていた。「八重ちゃん、あぶなっかしいところがある。」と姉は言った。そのうち、吉平は学友谷田の家に出入りするようになる。谷田は病弱な少年で母と二人で暮らしていた。船員だった父を亡くしていたが裕福な家庭に思われた。

その谷田が水泳訓練中溺死してしまう。谷田の母は息子の死後も吉平の訪問を歓迎し、吉平は彼女に女を感じるようになる。「姉ちゃん、女のひとが好きになると、死にたくなるだろうか。」と問いかけて姉を驚かせた翌日、吉平は谷田家を訪れる。そこで、吉平は谷田の母といつも出入りしている順也という若者との情事を目撃する。その直後、吉平はスペイン風邪から腹膜炎になり商船学校を中退する。九死に一生を得た吉平は、一年遊んで北海中学の二年に編入する。吉平は級長の寺川と仲よくなり、同人雑誌「クローバー」を一緒に発行するようになる。しかし、寺川は発展家で女学生とも付き合っていて、吉平は寺川が植物園で密会するときの見張役をさせられることもあった。お陰で公園の中で展開する幾組もの男女の痴態を見ることにもなった。そのころ図書館といと称して、吉平はシモを訪問することが多く、そのような一日、シモによって性の洗礼を受けたのだった。このように吉平は年ととも新たな男女関係の姿を見、体験を積んでいく。父親

が脳卒中で倒れ、一時小学校の代用教員を経験した後、中学四年に復学し、やがて学資を出してくれる佐藤家を頼って上京し、大人とのプラトニックな交流を体験する。環境が変わったせいか吉平は脚気になつたりするが、それもよくなったころ、従妹の道代から結婚話が起きたという便りがあり、九月になって北海道へ帰る。道代は縁談をきらつており、吉平との結婚を望んでいた。こうして二人は一線を越えてしまう。吉平の母も息子と姪を結びつけようという気持はあつたことだが、東京へもどつた吉平のもとへ道代から妊娠したという便りがあり、彼の前途はまっ黒になつた思いだつた。

4

私は『暗い流れ』における「キタ・セクスアリス」について追つてきたが、なお二、三述べておく。

第一は、私小説的な点である。和田は私小説の大家徳田秋声を愛し、秋声についての研究もかなりしていた。そして和田自身が私小説家であつた。『暗い流れ』の細部を見ていけば、和田の身边に取材したことが多く指摘されるはずである。和田は、

この小説に出てくる人名はできるだけ別の名にしたが、北海道の歴史に残っているような人は別の名に改めると、かえつて白じらしい感じになるので、ほんとうの名にした。⁽¹¹⁾
と書いている。また、八木義徳に、

どうして小説家という奴は、こうまでして、自分の恥や身内の恥

をさらけ出さなきゃいけないんだろうね。⁽¹²⁾
と語っていることから、私小説の流れを汲んでいることは、十分にかがえる。

和田は明治三十九年三月三十日に長万部で生まれ、大正八年四月函館商船学校に補欠で入学している。大正九年にスペイン風邪にかかり一年間を棒に振つたが、その間に図書館で文学書を耽読したという。大正十年、十五歳の四月私立北海中学の二年に編入学。その冬父が脳血栓で倒れたため、翌年七月から郷里の訓縫小学校の代用教員。期末試験だけ受けて大正十二年四月に四年に進級した。そして教頭のほからいで佐藤正男の個人的な育英資金を受けるようになった。同級生と同人雑誌『クロバア』を出した（一号のみ）。中学四年修了で旧制高校の受験資格ができるため、大正十三年三月、中学四年修了で退学、上京して佐藤家に住み込み、その家の子供の家庭教師をしながら神田の研数学館へ通つた。脚気のため帰省するが、大正十四年四月中央大法学部予科に入学、再び佐藤家の書生になる。昭和二年、従妹和田照との間に長男昭が生まれている。——このように大きく年譜を調べていくと、これだけ見ても『暗い流れ』と符合する点が多いのである。

第二は、幼時回想という点である。和田には故郷国縫を回想した文や国縫を舞台とした作品がかなりある。「どっちがどっち」（昭和四十八年）、「幼なじみ」（昭和五十年）、「雪女」（昭和五十二年）などはその一例である。

第三は、題名の『暗い流れ』についてである。江藤淳が「和田氏が

「暗い流れ」と呼んでいるのは、おそらく性のことであろう。」と指摘しているが、和田にとって「性」は暗い世界のものとしてとらえられていたのだろうか。昭和二十六年に発表した作品に「暗い血」という作品がある。女主人公佐山節子は心臓弁膜症という持病があるため、前途有望な学者を恋人にもちながら結婚もできない。そのくせ母が疎開している留守に母の現在の夫、言ってみれば義父にあたる前田と深い仲になってしまふ。彼女の母も彼女の父の死後、ずるずると男関係をもち、今では前田と子までなしている女である。また父方の祖母も、夫と死別してから高名な学者の妾になった人である。祖母・母・節子の性のありようを描いて「暗い血」と題をつけた和田は、明るい性を讚美する作家ではなく、暗く屈折した性を描く作家であったと言えるのではなからうか。

暗く屈折した性を描きながら、不倫の匂いがしないのは、人間は大きな性の力によって支配されており、その人間の行為は、大きな性の力によってなしたることであるがゆえに許されているからかもしれない。

三 咲子の転身願望

——『塵の中』の世界——

1

和田芳恵は、昭和三十九年二月『塵の中』（再版）の「あとがき」の終りに、

今度、五十回の直木賞を受けた私の感懐は、長らく手がけてきた一葉・樋口なつ子が下谷龍泉寺町へ落ちてゆき、小店を開く頃の日記の題名からもらっていたということである。私はついに一葉から脱れ出ることができなかつたらしい。

と書いている。一葉の日記の「塵の中」とは、本郷菊坂町（現在文京区内）から下谷龍泉寺町（現在文京区内）の、当時大音寺前と呼ばれた町で荒物駄菓子(13)の小店を開いていた時期の日記帳につけられた名称である。俗塵の中で生活したことにちなんでつけられたものであろう。そして、一葉研究に打込んでいた和田は、大音寺前に隣接する新吉原の女郎であった女性を描こうとして、この名を選んだものであろう。これは和田の意志でと言うより一葉への思い入れの深さゆえにおのずとできた題名であるとも言える。

2

『塵の中』は、

揚屋町の、小さな楼に浮名が住んでいたとき、なじみの直治にそそのかされて自廃した。

という書き出しで始まっている。揚屋町とは新吉原にあった、いわゆる吉原五丁町―江戸町一・二丁目、揚屋町、角町、京町一・二丁目の中の一つの区域であるから、女主人公浮名こと咲子は、新吉原の女郎だったのであり、彼女が身請でなく自廃して、直治の家に入るまでが第一話である。

浮名は年季の四年がきれるようになっていながら金遣いも荒くて借金が増えるほどであったが、その気性が客に愛されて二枚目から下がったこともなかった。馴染客には日本橋の請負師の北原や上野広小路

の時計店の番頭の耕がいた。金のある北原は浮名を身請けしたがっており、浮名もそれを望まぬわけでもないが、「妾」になるのはいやで、「奥さん」にあこがれている。そんなころ学問もあるらしい瀬川直治が通い始めた。直治は妻に死なれて一年足らずの身の上で、亡妻への思いを捨て切れないでいる。北原は事業に回したい金を浮名の身請けに使うとしていたが、金で人を買おうといういやらしさを見てとった浮名は北原につらく当たるのだった。そんな浮名を見て、直治は「僕でよかったら、この場所を脱け出さないか」と誘い、結局知人で新聞記者をしている山本の力も借りて浮名の自由廃業にこぎつける。山本は大学の卒論に「日本公娼制度の研究」を扱った人であった。直治も浮名の借金の一部に充てる程度の本人の所持金が必要と知って、先輩の所をまわって、その金を捻出したりした。こうしてようやく浮名を自由にさせても、すぐに家に連れて来ることはできなかった。家には小学二年生の娘と、妻の死後家事を見ている母がいた。母は水商売の女でも気に入った人がいれば再婚したらという意見ではあった。浮名こと咲子はしばらく市川の旅館暮らしの後、家に入った。母は咲子の二十四歳という若さや食事の支度ができるのかを心配していたが、やがて秋田の家へ帰って行った。咲子は娘の悠子になじもうとするが、悠子から直治といつか知り合ったのかなどと質問され、悠子の母を

殺したのは自分だと思われているのではないかと悩む。直治は直治で咲子と新しい世の中でひと苦労するためと言って、会社を辞めてしま

う。
以上が第一話ともいべき部分の要約であるが、ここで私がまず注目したのは、浮名こと咲子の転身願望である。金遣いが荒く、借金も多い咲子は、北原に身請されるか、新しい証文を入れるかの所になって、身のふりかたに迷っている。直治に北原との惚気を聞かせながら、北原からの迎えの声がかかっても、「でも、お妾はきらいさ。こんなところの女がどんなに世の奥さんというものに憧れているか、言ってみようもない」と言っている。自分のところへ、ただ「好きだから」と通ってくる直治にじれている。人妻願望が「むきになって」通ってくる直治という男鯉の妻の座へと心をかきたてるのだが、「いっしょになれる筈はない」ときめてもいる。

第二は、きらいな客に対する女郎の抵抗ということ。咲子を身請けしたい北原は、事業に回すつもりを咲子のために使おうとして、「これでお前が自由になれるのだよ。」と札の包みで咲子の頬をたたくと、「何さこんなもの」「いつ、あなたに、お妾にしてくれと私がつたのんだ？」と咲子はせめて、それからは登楼する北原と争いが絶えない。言い争う声が聞えたり、物を投げる音がしたりする。咲子の投げた刺身皿で北原は血を流したりもする。

第三は、直治の咲子への応援ということである。咲子の荒れ方に同情する気持と直治の再婚を望む母の言葉に促されてのことではあるが、

咲子の野性味にひかれた結果でもある。

第四は、咲子が妻の座につくに当たつての障壁ということ。咲子が廓を出るまでもいくつかの関門があつた。自由廃業するために警察署での取調べや諸手続き、この前に楼主に同意を得ること、そして借金のため。だがそれより大きな関門は、直治の娘悠子だつた。「おばさんは、どうして家に来たの。いつから、お父さんを知っていたの。いつまでも家にいるの。」とたたみかけるように質問してくる悠子に咲子はたじたとなるのだった。「お母さんを殺したのは、あいつだ」と思いこんでしまったらしい悠子」の様子から重い不安が行手をとざしているように感じている。

3

堅気な家庭に入つても咲子の不安はなかなか得られない。順を追つて検証してみよう。

堅気な妻の座を求めて直治の家に入つて間もなく、身請までしたいと言つていた北原が訪ねて来た。咲子の身許引受人になつている直治の住所を知つては、せつかく築こうとする新生活は脅かされてしまう。「ここはあなたの来るところではない筈よ」「そうか。お前は、今、しあわせなんだな」「ええ、とても、しあわせよ」咲子は冷たく追り返した。咲子は、北原と二度と逢わないためにも、また思いを残さないためにも優しい言葉をかけまいとしたのであつた。

直治の娘悠子は、母の没後、直治の手で育てられたため、直治の体にまつわりつく癖があつて、それが不潔のように思われるのであつた。そして、そう感じると縁日に一緒に行くのもいやになつて、直治と悠子だけを出してやつたりした。その夜は、直治との間もとげとげしくなつて、「てめえの娘が、かわいいだけじゃあないか。咲子なんか、どうでもいいんだろ、だましやがつたな。女房にするなんて、籍をいれようともしないじゃないか」と泣きわめいて、悠子の眼をさませたりしたこともあつた。

咲子はまた子供を産みたいと願つていた。直治は悠子のためにそれを望んでいなかったが、咲子は医者診察まで受けてきた。しかし、妊娠は不可能な体だと言われ、医者無力量を非難したり、悠子が学校から帰るのを待ちかねたように美しく飾りたてて、一緒に近所へ遊びに出たり、映画館へ行つたりもしたが、それも二、三日で、後は雨戸を閉めて、昼間から不貞寝する始末だつた。

悠子がいざな気持から咲子を母と思うようになったら籍を入れると直治は言うのだが、悠子は反抗的だし、咲子も好意的になれなくなつていた。

こんな生活の続くうちに戦争（太平洋戦争）も激しくなり、直治は南方の宣撫工作員となるための合宿所に入ったが、南方へ行くのを機会に咲子と離別する決意を固めた。留守宅に支給される手当を手切れ金に当てるつもりだつた。ところが、南方への出発が今日か明日かになつて、直治は自宅へ電報で呼ばれる。咲子は、悠子も私と別れたく

ないと言うから、葛飾に住む発明家で咲子の知人の草野の所で直治が働いて、今まで通り一緒に暮らしたいと言うのだった。結局、直治は咲子に案内されて草野に会い、彼の発明した光写式印刷を利用して科学兵器を複製する権利を得て営む事業一切の権限を得ることにして、自宅に葛飾書房の表札をかかげて、科学兵器の複製をするようになった。その仕事のため直治は技術本部の佐官待遇の嘱託にもなれた。咲子は自分に事業的な才腕があると思うのだった。

咲子は学校出の女をきらっていたが、悠子は真間の国府台学院へ進学した。

本土空襲も多くなつてころ、南支戦線で負傷して除隊した染谷庫三が直治の家に遊びに来るようになった。やがて敗戦。直治は戦時中軍に協力する仕事をしていたことが不安になつて身を隠す。そのころから、葛飾書房の仕事上出入りしていた戦争未亡人竹村みつ子と直治との仲を咲は疑い始める。みつ子が女子大出なのも気に入らないし、「女の匂いがぶんぶんする」のもきらいだった。

直治に対する不信感やみつ子への嫉妬心が募つてくると、咲子はみつ子の所へ出かけて口論することもあった。直治は咲子に「お前とは別れるつもりだ。」と言った。咲子は「私は決して、あなたとは別れません。」と言うのだが、直治は東京のどこかに隠れてしまった。それから一月ほどして悠子が姿を消してしまふ。咲子は学校に電話したり、翌朝は学校を訪ねて、悠子の安否を尋ねたりもした。咲子はみつ子への嫉妬心から直治を失い、悠子との女の本能からくる葛藤から悠

子にも去られたのだった。しばらくして、直治の弟から悠子は祖母を慕つて秋田に来ているという便りが咲子に届いた。

バラック建ての闇市が立つようになつて、染谷は本八幡のマーケットの中に惣菜屋を開くことになり、咲子はそこで手伝うようになる。特攻隊帰りの梶野もそのマーケットで外国たばこやせっけんを売っていたが、咲子は彼を弟のように感じるのだった。ある夜、咲子は映画見物の帰りに梶野に会い、家に寄せたことから、梶野はしばしば咲子の家に来るようになっていく。

咲子は直治が帰らないで、時計を持ち出して染谷の所へ行き、来合させた鳥屋の笹島に売る。その夜、家に呼んだ梶野と結ばれるが、梶野が一途になつてくるのに対し、咲子は梶野といっしょの暮らしは望まず、また直治の帰りを怖れるのだった。咲子は笹島に頼んで梶野との縁を切りたいと思つた。笹島は「あなたの御主人に代つて、護つてあげよう。」と言つて、その夜から咲子の家に泊るが、夜更けて訪れた梶野と笹島は決闘することになつてしまふ。咲子は二人の男に話をつけて、近くの市川中学の校庭へ連れて行つた。二人は校庭で殴り合つた。二人の勝敗はつかなかったが、二人は咲子から手を引くこととなり、咲子の家財道具は笹島が買い取つてくれた。咲子は新しい生活を求めて故郷へ向かつた。

治が妻に死なれて一年足らずのころをこの小説の始まりの時期として作者自身の年譜の上にこれを求めると、昭和十四年の暮から翌春にかけての時になる。また、作者の娘陽子⁽¹⁵⁾が小学二年とすれば昭和十一年のことになり、実生活とは異なってくる。したがって、ここは妻の死後一年ほどの作者の生活や心情を背景に作品が展開されるとみてよいだろう。そして、昭和十四年に悠子が小学校二年生とすれば、終戦の年には女学校二年生ということになり、終戦後いくばくもなく咲子は故郷へ帰るから、この作品はほぼ六年ほどの間の物語であると言えよう。作者周辺の事実関係を拾えば、昭和十四年二月に妻照が病死し、当時長男昭十二歳、長女陽子十歳がいたのだが、作品の上では娘が一人いたことにし、しかも年齢も下げて、はかなげな存在に仕上げている。

直治に当たる作者自身は、昭和十四年のころは三十三歳、新潮社の大衆雑誌『日の出』の編集長であった。翌年、『三田文学』に「樋口一葉」の連載を始め、十六年には同人雑誌『山』（四月創刊）に発表された「格闘」が同年上半期の芥川賞候補作品になり、これを機会に八月新潮社を退社、文筆生活に入った。これ以後、終戦後までの年譜を見ると、

昭和十六年十月 『樋口一葉』 十字屋書店刊。

昭和十七年五月 短篇小説集『作家達』 泰光堂刊。

九月 長編小説『十和田湖』 泰光堂刊。

十二月〜十八年十月 「未定稿『にぎりえ』の発見と研究」

『三田文学』に連載。

昭和十八年九月 『樋口一葉の日記』 今日の問題社刊。

十一月 長編小説『離愁記』 今日の問題社刊。

昭和十九年 戦局不利。執筆活動困難。房総文学会に属し、軍需工場の文学活動や千葉地区司令部の宣伝活動を手伝う。文学報国会の幹旋で南方宣撫工作にあたるため萩山道場で合宿訓練を受ける。

昭和二十年 飛行機が飛べないので南方行きは中止。東北の鉱山慰問、房総防備隊の慰問、六月からは土方兵として茨城県石岡付近で過ごし、終戦。

昭和二十一年 兄の経営する英話通信社の編集を手伝う。かたわら数社の嘱託で多くの収入を得た。

というような足跡を知ることができる。『塵の中』の直治と重なるのは、咲子と一緒にしてから会社を辞めていること、戦争末期になって南方の宣撫工作要員となるため東京郊外の合宿所に入って訓練を受けるようになったことである。また、記録としては残っていないが、静子未亡人のお話では作中の咲子に相当する女性とのことがあって新潮社も辞める仕儀になったようであり、一緒になってからのその女性のもとより良妻とは言えないありさまで、子供たちも寂しい思いをしたと言うことである。

咲子は良妻賢母ではあり得なかった。しかし、この作品は咲子の転身願望の物語であると考えられるのである。廓で働く女にとっては人妻になることが夢だと咲子は言っている。しかし、廓を抜け出すために妾になることは望んでいない。札束で頬をたたくような北原を嫌ってつかんだのが、小学生の娘をかかえた鰥の瀬川直治だった。学問もあり、一途な直吉ではあったが、娘悠子の抵抗と直吉の母の白眼視と戦わなければならなかった。子供を産みたいという願いも身体的理由で不可能とわかった。直治との関係も芳しくない。直治が娘を可愛がり娘が父を慕うのが咲子には不満である。娘悠子に手をさしのべようとするが、娘は好意を持っていない。これは後妻として入った女性が多かれ少なかれ経験することだろう。こうした状況の中で、直治と咲子の間もしっくりはいかない。みじんの愛情もない行為の中で、「おい、今までの男のなかで、いちばん良かった相手は誰だ」と言う直治の言葉に「あんまりです、あんまりです」と言っ咲子は泣きわめく。こんなことがあつて六年ばかりの生活が続くが、将来に円満な家庭を営んでいける見通しはなくなっている。

咲子は「自分の意志で、かつきりと判断したように生きてゆく自由を求め」、それを助けてくれる人と思つて直治を頼つて廓を出たのに、直治がわからなくなってきた。「悠子に自然な気持がわいて、母と思うようになったら戸籍に入れる」という直治の言葉はほんとうであつたらうが、悠子が咲子を母と思う日はないと思われた。直治が仕事で

地方に出張して家をあけたり、やがて南方の宜撫工作要員として合宿訓練を受けたりしている留守中、咲子と悠子の仲は好転し、しばらくは良い状況が続くが、戦後間もなく、仕事上知り合った女性と直治との仲を疑い始めたことから、再び直治との仲が険悪となり、悠子の家出、咲子の不倫と、失継早に直治と咲子の家庭崩壊の条件はそろふ。結婚生活は男女相互の思いやりの上に成り立つものだが、その基本が守れなかったために、咲子は自分一人の世界を求めて故郷へ向かわねばならなかったのである。

四 結 び

『暗い流れ』にしても『塵の中』にしても、ともに作者とその周辺に取材した作品であることは明らかである。「どうして小説家という奴は、こうまでして、自分の恥や身内の恥をさらけ出さなきゃいけないだろうね。」⁽¹⁷⁾というつぶやきに、私小説家としての和田を見るのである。

『暗い流れ』は幼少年期から青年期までを描いた晩年の作品であり、『塵の中』は三十代の話を四十代後半になつて描いた作品である。

『暗い流れ』は、作者を思わせる主人公の成長の過程が語られ、『塵の中』は『浮名こと本名咲子』という女郎の自由廃業から妻の座へ、そして離別して新生活を求めて帰省するという転身の図が述べられている。

両作品は、作者の幼年時代から四十歳のころまでの実生活を下敷に

しているのだが、主人公が同じでないところに注目される。作者の家庭にとっては、妻（あるいは母）の死後、家に入ってきた女に家の中をかき回され、子供にとっては災難であり、少なくとも当初は好きで入れた夫（作者）にとっても地獄となったであろう事実を、女を主人公として書いているのである。

次に気づくことは、『暗い流れ』が「キタ・セクスアリス」の現代版を心がけたというほど性的な表現が多いのに対し、『塵の中』は意外に少ない。廓の女を描いているが、女主人公が堅気な家庭の女になりたいと願っていたことと関係があるかもしれない。ただ数少ない、そういう場面では、

みじんの愛情もない、ただ、お互いを、いじめぬくような行為のなかで、「おい、いままでの男のなかで、いちばん良かった相手は誰だ。」上からかぶさるように、直治は咲子をのぞきこみながら、救いのない声で言った。

というようにシリアスな生かされ方をしており、和田作品における性の重さを感じるのである。

和田は『塵の中』を書く時点では咲子のモデルとなった女性とのことが生々しく心に残っていたのであろう。まだ、自分を主人公にした私小説を書くまでに諸般の事情は至っていないかったのもあろう。和田は『暗い流れ』を書き終えた翌年（昭和五十三年）の三月から雑誌『群像』に長編小説を連載する予定になっていた。どういう作品を考えていたのか、今となってはわからない。もし、続編を期待させる形

で終わった『暗い流れ』に続く年代を扱う作品であったら、瀬川直治こと花田吉平の大学生時代から出版社編集者時代、さらには『塵の中』時代を書き綴ったことであろうと想像されるのである。

〔注〕

(1) 『読買新聞』。

(2) 「接木の台」は昭和四十九年六月号『風景』に発表。同年九月、「厄落し」「女の匂う家」「靴をぬがせるとき」「傷だらけの顔」「記憶の底」「どっちがどっち」「接木の台」「生き延びて」を合わせて短編小説集『接木の台』（河出書房新社刊）として出版。「抱寝」は昭和五十年一月号『文芸』に発表。同年九月、「好みの弁当」「抱寝」「囃し詞」「幼なじみ」「猫もいる風景」「老木の花」「母の寝言」「或物語の発端」を合わせて『抱寝』（河出書房新社刊）として出版。

(3) 十字屋書店刊。

(4) (3)に同じ（『樋口一葉』十字屋書店刊）。

(5) (3)に同じ。

(6) 『読売新聞』（夕刊）に昭和五十二年八月九日より三十一日まで連載。

(7) 『自伝抄』 八月二十七日発表。

(8) 『自伝抄』 八月十八日発表。

(9) 昭和五十一年十二月二十三日（夕刊）。

(10) 『自伝抄』 八月十八日発表。

(11) 『自伝抄』 八月二十五日発表。

(12) 『集英社文庫・暗い流れ』解説（昭和五十四年十一月刊）。

(13) 一葉は半紙を同じ合わせて日記を書いたが、たいいてい一、二か月ごとにまとめられており、それぞれに題がつけられている。龍泉寺町時代の日記には「塵の中」「塵の中日記」「塵の中日記」などと名づけられたものが多い。

- (14) 昭和十四年二月十六日に作者の妻照は病没している。
- (15) 昭和四年生まれ。
- (16) 昭和十五年の『三田文学』六月号から連載し、翌年八月に完結している。
- (17) (12)に同じ。